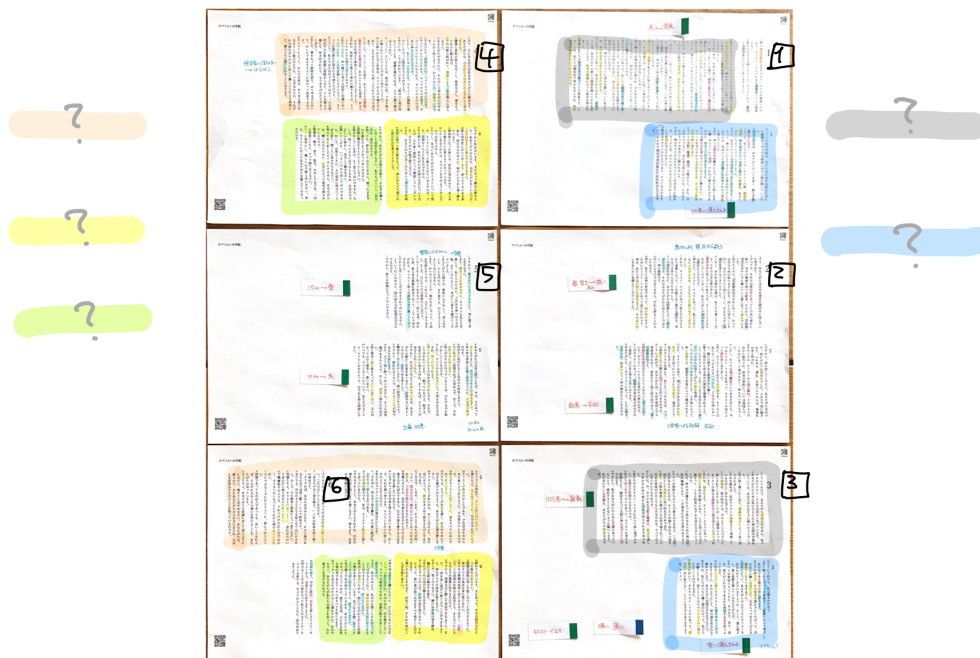




まると読む・エペソ人への手紙 #4 段落間のつながりを考える

エペソ人への手紙：段落のつながりを探る

2020.4.4



まると読む聖書、エペソ人への手紙ということでチャレンジして頂いています。

キーワードをよく見て、繰り返しの出てくる言葉をよく把握して段落に分けて、段落間のつながりを探るといふ段階になっています。この段落に分けたのは私ですので、違う分け方というのももちろん考えられます。どうして分けたのかということは、段落のつながりを見ていくと、この人(私)は、どうこの手紙を見ているのかということが分かると思います。分けている意味は、もともとこの手紙は、このように編集されているのではないかと。パウロはこういう話の展開の仕方であらうと書いてあるのではないかと。探っているわけですね。並行しているものとして書く書き方が、この時代の手紙で表現する方法、書き方ということだと思いますので、どう編集されてどう書いてあるのかという事を探っているというのが、今やっていることなんです。

分けた紙を印刷して、もう一度キーワードに色を塗ったりして、この順番に並べてみてください。全部で6枚の紙になると思います。1と言っている1章の紙がここ(右上)にあります。4と言っている紙が(左上)こんな形ですね。これをキーワードを見ながら分けている時に、ここは並行してる箇所だとわかるような箇所がありますから、そういう箇所を手がかりにして分けていくと、1章から3章と、4章から6章が違うよねということ、全体を読んだ時にわかりやすいものかな。1章から3章までが教理で、4章からは実践だというような、名前、題ですね。分けた時の区別する題をつけたりします。教理と

実践と。確かに「信すべきこと(1~3)」と「成すべきこと(4~6)」というような形で分かれているように見えます。

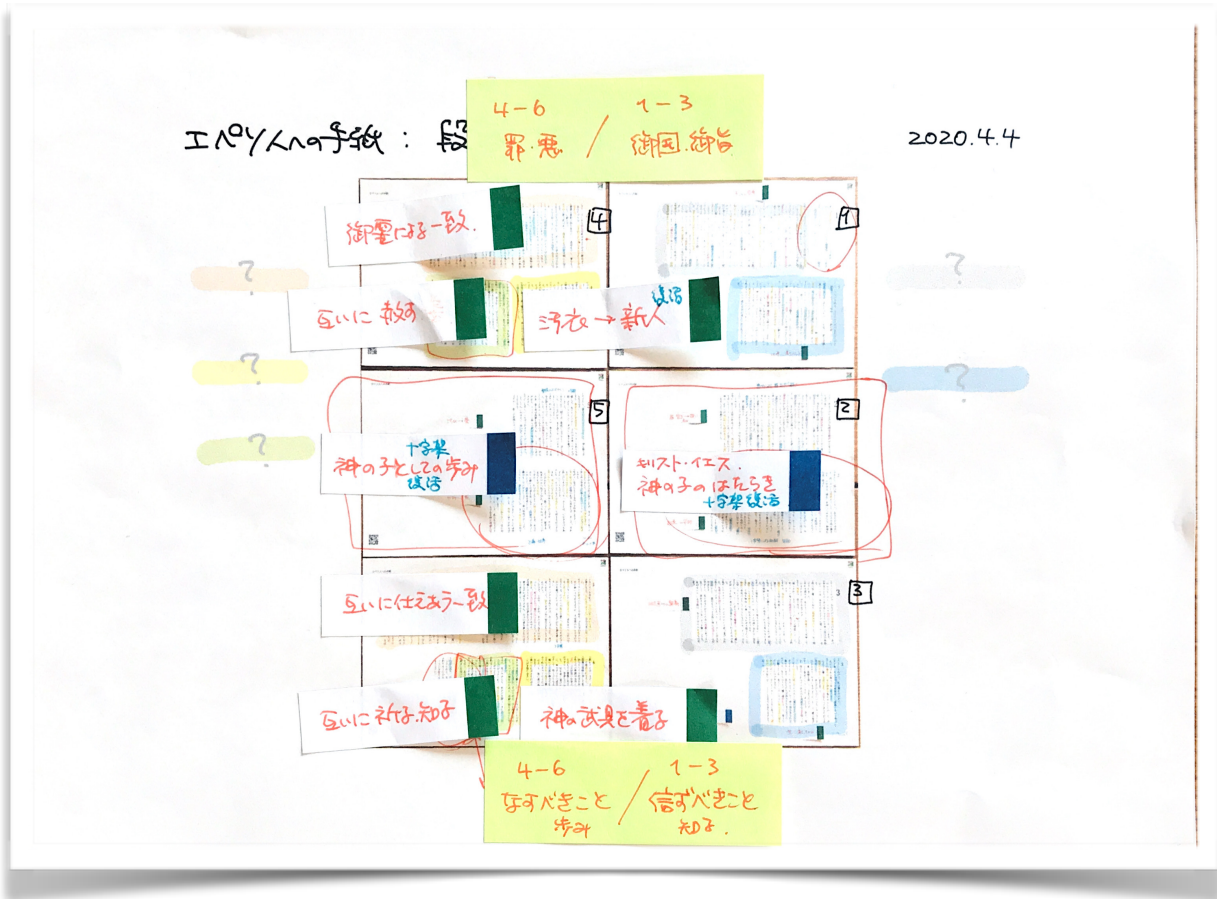
例えば、成すべきことということをもう少しこの本文に即した言い方で言うと、この4, 5, 6の段落の出だしのところを見てください。4の出だし「召しにふさわしく歩みなさい」4の2段落目「虚しい心で歩んでいるように歩んではいけません」という歩みの話です。5の出だし「愛されている子供らしく愛のうちに歩みなさい」「光の子どもらしく歩みなさい」6の段落のところは「互いに従いなさい」ということですね。ですから、なるほど4からのところは、「歩みなさい、歩みなさい、歩みなさい、歩みなさい、従いなさい」ということですので、後半は成すべきこと、どのように歩むべきかということをお教えているものだというように見るわけです。ただ、それで分けるんですけど、全体を今度見ながら、題として区別は出来たということです。区別は出来たんですけど、「この1章から3章のテーマは何なんだろう、この中心は何だろう」ということは、また細かくこの中を分析していきながら見ていくことになります。

全体に「愛」という言葉がたくさん出てくるのですね。愛と関係している言い方でこの区別をしたほうが、よりエペソを理解するということに役に立つのだろうと思います。1から3の方は「信すべきこと」ということでしたけれども、何を信じるかということ、「神が私たちを愛してくださった、神が愛している、神が愛してくださった」。これを「知る」ということが、1から3。4から6は「だから私たちは互いに愛し合いなさい」ということですので、この「愛」ということがテーマの手紙として、信すべきことと、成すべきこととこのを見た方が、より題としてふさわしいものになっていくと。さらに磨かないといけないということです。題をつける、区別する。そして良い名前をつけるということをしていくということです。

1から3と4から6を二つに分けた時に、この形に分けると、このグレーのところ、ブルーのところの似てるものだよという意味ですね。黄色、緑、そして、オレンジという箇所が似ている箇所だよということです。この切れている紙、レイアウトされている紙が何がいいかということ、この水色のところと水色のところ、これは文章が飛んでいますけど、並べて見ることができます。1の後半の祈りの部分と、3の後半の祈りの部分が、祈りなのですけど、20節から23節も祈りの説明みたいなものですから、祈りの部分に含めていますけども、この中でまた似ているものもあります。「満ち溢れる、満ち溢れる」「理解する、知る」何か似ているよねと。似てはいますが、今度違うところを探さないといけない感じですかね。双子のような感じですから、今度違うところでは「力」も出てきますね。その似ているところ、違うところを見るという時に、並んでみると便利ですよ。祈りですけど、何を祈っているのかということを探して、?(はてな)と書いてあるところに埋めると。

4の前半と6の前半。4章と6章のところ、形が似ているということですけども、4章の前半と6章の前半で、「一つになる、一つになる」ということがよく出てくるということに気がつく人もいますね。「一つになる」ということが多いのが、2の後半と、ここもこの半分ずつで見なさいと言っているんですけど、ここに(4, 6)「一つになる」というのが目立つわけですね。ですが、6章の前半も「一つになる」事だよということを言ったら、「それはどうしてそうなるんだ」と?(はてな)がついた人がいまして、それで説明をしたりしました。

一つになるということは、2章の後半は異邦人の話が出てきますね。4章の最初は、かしらとからだ。キリストがからだで、そのからは一つです。どうも、これは教会のことを言っているようです。特に教会という書き方はしていませんけど、キリストのから



だという「からだ」ということが一つになる中で、強調されています。5章から6章のここですね。この中でも、頭と体で従い合うようにということを行っていますけれど、一つになるということは、「夫と妻は一つになる」は、ここに(5:31)「二人は一体となる」はあるので、良いのですが、「父と子、奴隷と主人、従い合う、仕え合うは一つなのですか」ということだったのですが、父と子が一つになる、従い合う、主人と奴隷が従い合う、仕え合うということは、一つになるという行為なのですね。それでこの主人と奴隷、父と子、夫と妻が一つになるという力ある働き、その力によって建てられていくということが、こういう対比を通して教えられる。御霊の一致、御霊の一致、御霊、信仰、御霊と信仰、バプテスマ、望みとかしらである、教会のかしらである使徒、預言者、伝道者、牧師、教師。そのあたまとからだが一つ。「満ち満ちた」という言い方をしていますけど、ここには満ち満ちたは無かったか。あちこちにあるから混乱しますが、このあたまとからだは一つです、からだの中は一つですみたいな感じですかね。この教会、「キリストが教会のかしらであり、からだの救い主であるように」と。この教会はからだですから、からだの中が一つ。かしらとからだが一つ。牧師と教会、教師と教会、教会のリーダーと教会員は一つです。教会員同士も一つですとような違いですけども、これは「一つになる」というテーマだねということが、こういう対比では分かるかと思います。

分析をしている時に、この緑色(4~6)のところに挨拶がありますよね。「テキコが私のことを知らせます」という挨拶があるのですが、これは最後の導入の挨拶と、最後の挨拶というような、生きている手紙なので、挨拶も入っているのだろうと思うこともそうなのですが、ここは緑でくっつけています。なぜなのかというと、この緑のところを並べますね。緑のところはこの二つ、この二つ(4と6)をよく比べてみて下さい。よく比

べてみると、何が見えてくるのか。これは(6章の方は)「互いに」ということです。パウロは「私のためにも祈ってください、私のためにも祈ってください」と頼んでいるのです。それで「私のことを知ってください、知って励ましを受けてください」ということで、お互いのために祈る。お互いのことを知ってもらうと知らせるという事がここに入っています。4章の方は互いのことを赦し合う、体の一部分だから。悪魔に機会を与えないで、正しいことを行って互いに赦し合う、互いに赦し合う、互いに祈り合う。知り合う。知るということは、この1章から3章の中で、とても大切になっています。特に、この水色のところ(1、3)、祈りの中で神を知る、心の目がはっきり見える、知ることができるよう。理解する力を持つ。愛を知る。この知るということがとても強調されていますよね。「あなた方のことを感謝して祈っていますよ」と言っていますよね。

知るということと、夫と妻のこと(4~6の関係)。夫と妻は、妻を知って二人は一体となるということですので、知ることと、一つになることということは、創造の初めから言われていることですね。被造物においても、あらわされている。知るということは、一つになる。一つになるために知り合う。祈り合う。知り合う。これは、すごく大切です。教会が集まって、お互いに知り合う。妻と夫も互いに知り合う。これは愛の一致を求めている行いということになると思います。なると思うというよりは、そのようなことですよということを教えるために、同じ位置づけになっている段落で、赦し合う、知り合うと。

その意味で、赦し合うですから、忘れる感じですよ。知っていることを忘れる。忘れてあげると感じます。この赦す(4)、こっち(6)は知ることという並行がある時に、このテキコを送って知らせますよということを言っていることにもっと意味があるかなということが分かるんだと思います。

隣の黄色い段落の方(4~6)は、新しい人を着る。武具を着る。着ている話が繋がっています。ここに闇と戦ってますよね。暗くなっている。闇と戦っている。悪い策略、悪だくみ、悪霊、悪魔に機会を与えるな。そんな話がよく出てくるのですけれども、ここには書いていませんが、5章の後半のところに、「光の子どもとして歩みなさい。以前は闇でした。実を結ばない暗闇のわざに加わずに、「光、光、光」と光の話がありますけど、この段落はこの暗闇と戦っている光の子どもだということ、対比的に表裏のような形で書いてある。創造の初めから光と闇ということですので、光を見たら闇との対比で見るといことを思い出さないといけないということです。ここに、光と闇というのがあるよねという事が繋がりと見て、出てくるものかなと思いますので、この緑のところ(4~6)「互いに赦す、互いに祈り合う、汚れた衣を脱ぎ捨てて新しい人を着る、神の武具を身につける、互いに仕え合う一致、御霊に満たされる一致。御霊が与えられないと仕え合うなんてしませんからね。

そうすると、この前半、後半が「成すべきこと、信すべきこと」というような繋がりでしたけど、そういえば主の祈りの話にも似てるかもね。御心、御心って出てきたよね。支配してくれる主の話は、天で支配してくれるみたいな話があったね。罪を赦して悪者から守られるようにという話があったよね。というと主の祈りの教えと並行してるのかなというようなことが連想されていくと思います。私もまだ終わっていません。特に、この2章と5章の役割は、エペソの手紙の中で何なんだろうということは、まだ探っている途中です。皆さんもこの細かいところを見つつ、大きな枠組みとの眼鏡で見ながら比べて、全体のメッセージを把握するということを進めて行ってください。